

旧真田山陸軍墓地に建立された野田村遺族会の 墓碑169基について

Research Notes

横山篤夫

はじめに

大阪市天王寺区真田山町から玉造本町一带にひろがる旧真田山陸軍墓地には、1998年1月現在5,299基⁽¹⁾以上の墓碑が静かに並んでいる。この墓碑群のなかに、他の墓碑と著しく異なっている169基の墓碑がある。その相異点をあげれば次のようである。

- (1) 「大阪府南河内郡野田村遺族会」という一つの村の遺族会が、一括して村の戦没者の墓碑を建立していること
- (2) 遺族会の碑に「昭和23年9月24日建立」とあり、戦後にまとめて建てられたこと
- (3) 旧陸軍墓地なのに、ここにだけ海軍の戦没者の墓碑も含まれていること
- (4) 墓碑の石質が他の墓碑とは異なること
- (5) 将校・下士官・兵士の墓碑が混在して同一規格で二列に並んで建っていること

なぜこのような異質の墓碑が建てられたのかを疑問に思い、この野田村遺族会の墓碑が建立された経緯を明らかにする必要がある⁽²⁾と感じた。その際、野田村の全戦没者が対象となっているのか、なぜ1948（昭和23）年に一括建立することになったのか、戦没者の遺骨はどこに納められているのか、



図1 旧真田山陸軍墓地

追悼行事はどのように行なわれてきたのかなども課題として浮上した。本稿はこれらについて、現在までに判明したことをまとめたものである。

1 野田村の概況

ここでとりあげる野田村は、1889（明治22）年から1950（昭和25）年まで、僧行基が開いて有名な狭山池の北側にあった地方自治体で、初めは大阪府丹南部に、1896（明治29）年からは南河内郡に所属した。北野田、南野田、高松、丈六、西野新田の5か村が1889年に合併して野田村が成立し、旧村名は大字名として残った。野田村発足時の人口は1,999人であった。

1950年、西隣の大草村と合併して登美丘町となったが、この時戸数1,542戸、人口は6,752人となった（図2参照）。

さらに登美丘町は、1962年に堺市に合併され、旧野田村は大阪府堺市北野田、南野田、高松、丈六、西野となっている⁽³⁾。

登美丘町が発足して4年後に、その経済について概観した次の記述は、端的にこの地域の特徴をとらえている。⁽⁴⁾

本町の経済発展の跡を顧りみるには、先づそれが本質的に相異なる三つの要素から構成されていることが考えられる。即ちその第一は旧野田村を中心とする水田農業と旧大草村を中心とする畑作農業であり、第二は現代になって交通上の要駅として急激に発展した旧野田村大字西野を中心とする商圈の拡大と、旧大草村に多い工業の発展である。第三は昭和六年関西土地会社による大美野住宅地経営の結果、急激な人口の増加と共に当町の人々が商業上又は公務員として

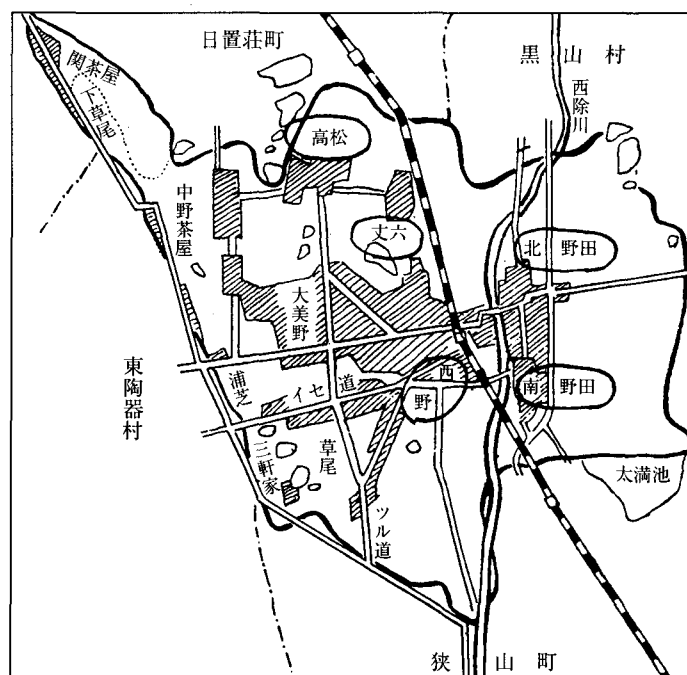


図2 登美丘町のなかの旧野田村の5つの字

出典：『登美丘町史』挾込地図の縮小図に加筆。

○で囲んであるのが旧野田村の字名である。

大阪市を中心にその活動範囲を拡大したことである。以上の三者が互いに因果関係を保ちながら(中略)南河内郡西部の経済的・文化的中心地たる地位を占めている。

つまり野田村は、水田を主とした農村だが、その中央を南海高野線が走り、1914年に北野田駅が開設されて駅周辺には商店街が形成され、さらに1931年には大規模な宅地開発が開始され高級住宅街⁽⁵⁾を包含して人口を増加させていった。因みに国勢調査によると、野田村の人口は1920年から1935年にかけて1.75倍に増加している。これは南河内郡全体の同じ期間の人口増加1.29倍を大きく上廻るもので、この間の野田村の社会増の傾向を示している(表1参照)。

その後アジア太平洋戦争の末期に、大阪市等からの疎開で人口が増えるが、戦後次第に旧に復した。そして大阪市の近郊住宅地として、特に高度経済成長期には小規模な宅地開発が進み人口が増加してきた。

1998年現在、この地域は「高野線北野田駅前再開発事業」と名付けられた堺市東南部の地域核拠点市街地の形成をめざす再開発事業⁽⁶⁾によって、急速にその景観を変えつつある。1996年8月、堺市によって市街地再開発組合が設立され、2003年にその事業完了が予定されている。そのため住民の異動も頻繁になってきており、殊に再開発事業の指定地区に該当する西野・丈六・高松とその周辺は、旧野田村以来の地域共同体をそのまま維持するのは困難になりつつある(図3参照)。

この南地区と指定した区域には、北野田、南野田、西野の共同墓地があり、かつては土葬で犬などに死体を荒されないように「いがき」でかこった風俗があったという。北野田駅南方約100メートルの西除川沿いの低地に多数の墓石があったが、1997年6月に高野線沿いの更に南方の新しい墓地に移転が完了し、跡地は商業施設などが整備される予定になっている⁽⁷⁾。この古い墓地の駅からの入口の一区画に野田軍人墓地(後述)があったが、これも既に移転が終了した⁽⁸⁾。

2 墓碑建立の経緯

これまで述べて来た社会的変動に加えて世代の交代もあり、半世紀前の戦後間もない時期の出来事については、次第に地域の人々に尋ねてもわからなくなっていく。つつある。

旧真田山陸軍墓地に1948年9月24日に墓碑を建立した野田村遺族会についても、この事業に直接携わった中心人物は既に亡くなっていて、直接話を伺うことは出来なかった。この野田村遺族会は、その後小学校区を基に分割され、堺市遺族会の分会として野田(主に北野田、南野田地域)、登美

表1 野田村の人口の推移

年 度	人 口	記 事
1889 (明治22)	1,999人	野田村発足
1920 (大正9)	2,378	
1925 (大正14)	2,755	
1930 (昭和5)	3,329	
1935 (昭和10)	4,168	内 男 2,085人 女 2,083人
1947 (昭和22)	6,369	内 男 3,073人 女 3,296人

出典：1889年は『登美丘町史』273頁、1920、1925、1930、1935年は国勢調査に、1947年は「野田大草両村合併調査委員会報告書」による。なお、1935年から1947年の急増については、疎開による人口増の影響も大きい。野田国民学校の児童数は、1940年に883人だったのが1945年には1158人になっている。これは疎開者の児童と学校単位の疎開児童の転入学の両方の要因による。



図3 北野田駅前開発事業の指定地区

出典：『広報さかい』1997. 10. 1付け

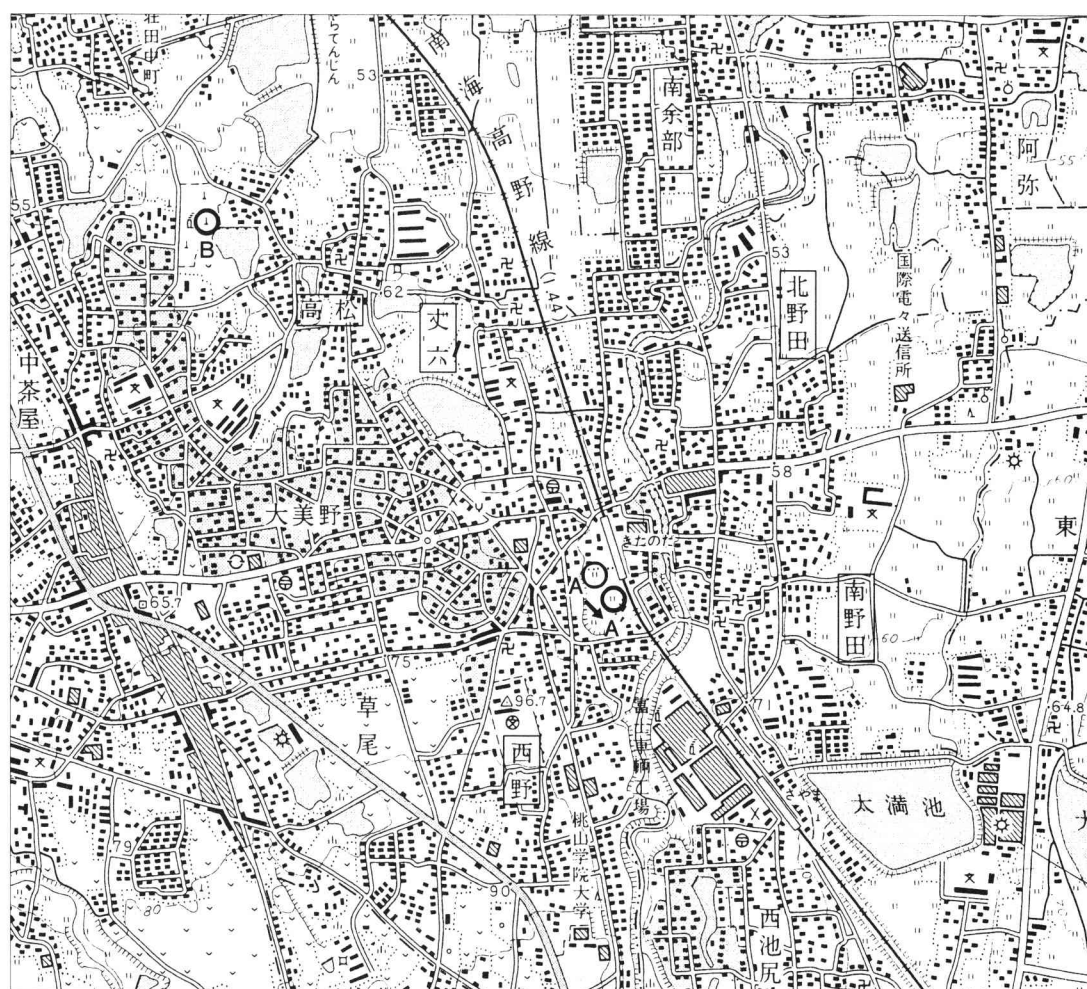


図4 地元軍人墓地の所在位置

1980年3月30日発行の地形図『古市』(1:25,000) 国土地理院の部分を86%に縮小し加筆したもの。旧野田村の字名を□で囲んだ。○は地元軍人墓地の所在位置を示す。Aは野田軍人墓地、A'は1997年6月移転後の野田軍人墓地を、Bは東登美丘(高松)軍人墓地を示す。本図の使用は国土地理院の承認を得ている。

丘東（主に高松、丈六、西野地域で一部に旧大草村の地域も含む）を単位に活動してきた。そこで、この遺族会の責任者、関係者から墓碑建立の経緯と、旧村や遺族会としての慰霊・追悼行事の概要を聞きとったものをまとめたものが次の各箇条である。

- (1) 墓碑建立の中心になったのは、西野の有力者だった松井良一氏⁽¹⁰⁾で数年前に亡くなった。北野田、南野田、西野、高松、丈六の有力者が協力して進めたが、そのメンバーも現存していない。松井氏の遺族に書き付けなどが残ってないか聞いたがないということだった。
- (2) 従ってなぜ一括して建立することになったのか、については明らかにできないが、野田村総出でつくる雰囲気だったことは憶えている。遺族全員が参加したとは断言できないが、殆んど知っている人は参加していたように思う。ただ中には反対した人もいて強制ではなかったという記憶の人もある。『登美丘町史』にもこの経緯は全く触れていない。
- (3) 墓碑は村の石屋が造った。青年団も総出で、トラックで真田山陸軍墓地の入口まで入り、そこ

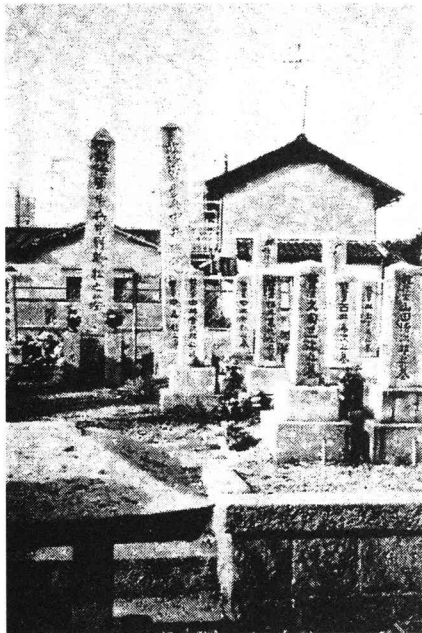


図5 野田軍人墓地

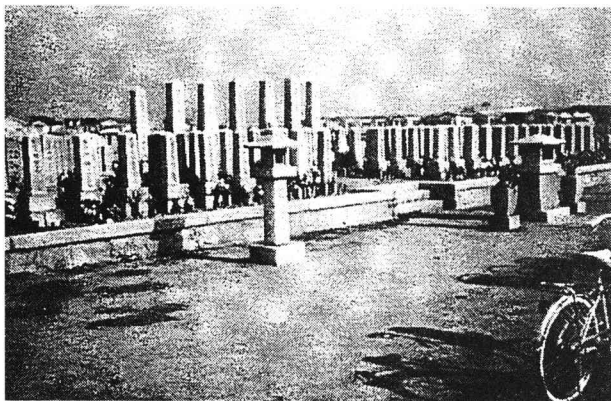


図6 登美丘軍人墓地（高松軍人墓地）

図5・6とも岡本寅一著『堺市旧野田村の歴史』所収

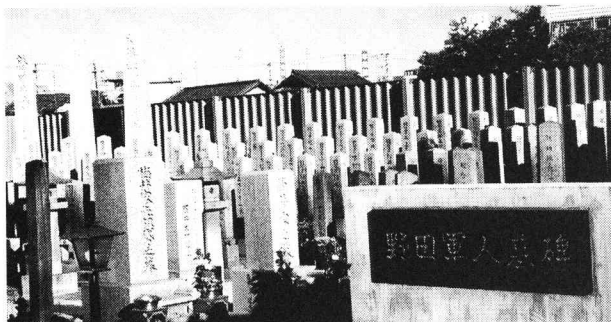


図7 移転後の野田軍人墓地

から青年団員が奥の建立地まで運んだ。人によっては、墓碑は馬力で運んだ、と聞いた人もいる。

- (4) このための資金がどこから出たのかはわからない。ただ、当時どの家もそんなに余裕があった訳ではないし、軍人恩給もなかった時代だったから、お金を集めて作るという話だったらまともらなかったのではないかと、といわれると確かにそうだという気がする。しかし青年団に参加したが、資金の話は聞いた憶えがない。
- (5) 真田山の墓地は整然としていたし、慰霊祭の前には村の人が掃除をしに行った（図8，図9参照）。慰霊祭には村中で行ったと思う。遺族は勿論だが、村の有力な人も沢山行った。ただ遠いので大変だったし、命日にお参りに行くというようなことはしにくかった。そんなことで不満も出たようだ。
- (6) そのためかどうかはハッキリしないが、1950年頃、北野田、南野田、西野の共同墓地の上の約100坪の土地を所有者が無償で提供する話があり、そこに野田軍人墓地が北野田、南野田、西野の遺族によって作られた。この時は1軒3,000円ぐらい出したと思う。残りは登美丘町が出してくれたように思う。だから全員参加ではなかった。全部で89基あり、基本的には真田山のと同じ墓碑だが、希望により大きな墓碑にしたところもある（図5参照）。
- (7) 同じ野田村でも高松と丈六は昔から火葬をしていて、高松の西方に数百基の墓石の並ぶ高松共同墓地がある。現在は旧大草村等も含むが、その一画に登美丘（高松）軍人墓地が遺族年金を拠出して作られたのは、軍人恩給が出だした頃だった。1991年には軍人墓地の周辺を整備し、1995年には50年祭を遺族会で行なった。138基の墓碑があるが、高松、丈六の分は54基で、軍人墓地のと同じ墓碑だが、希望者は各自で負担して大きな墓碑もある（図6参照）。
- (8) 野田と登美丘の軍人墓地ができてからは、真田山にお参りするのとは疎遠になった。月の命日やお盆には地元軍人墓地にお参りする遺族も少なくないが、真田山には一般の人は関心が薄いと思う。数年前に、遺族会の役員らで真田山に行き、判読しにくくなった墓碑



図8 2列に立ち並ぶ野田村遺族会の墓碑
(旧真田山陸軍墓地内)



▶ 図9 野田村遺族会の墓碑 (旧真田山陸軍墓地内)

に墨を入れた。

- (9) 野田軍人墓地は、再開発事業の道路にかかるということで、1996年6月に新しい墓地の一面に移した(図7参照)。この時掘り出した中に「昭和25年」と埋める時に墨書した包があって、1950年頃野田軍人墓地が作られたことがわかった。
- (10) 遺骨のあった場合、家墓に埋葬されていることが多いのではないかと。真田山へは遺骨は持って行ってないと思う。記念品といったものを埋めたのではないかと。地元の軍人墓地でも遺骨はないと思う。

細かな点では、聞きとった人によって違う内容もあったが、大体共通して以上の点が明らかになった。

そこで課題として残る何故1948年に建立されたのか、その資金は遺族の負担でなかったとすればどこから拠出されたのか、何故真田山だったのか、といった諸点について検討してみる。

先ず1948年9月24日という日時に注目して、その前後の動向を追ってみると、次の事項が関連して挙げられる。

1947年10月25日 野田、大草両村合併調査委員会が、両村合併による利害特質をまとめて報告書を作成、これをもとに両村で検討するが、大勢は合併を可とし、1950年4月1日両村は全財産を新町に帰属するとの協議で合併し、登美丘町が発足した。⁽¹¹⁾

1947年11月15日 旧真田山陸軍墓地が、戦後国家による祭祀や維持が出来なくなり荒廃していたのを、四天王寺住職田村徳海氏らの発起人によって財団法人「大阪靖国霊場維持会」が作られ法要が開始され整備された。⁽¹²⁾

野田村と大草村の合併については、何度も議論されてきたがその都度「その機が熟さず」として実現を見なかった。しかし野田村が町制施行をめざすことを決めて大阪府の地方事務所に申請したところ、大草村と合併して町制を施行してはどうかと勧告され、一気にその気運が盛り上がった。⁽¹³⁾

そこで1889年以來の、野田村消滅に対する村民の愛惜の情は、新町実現への期待と共に強かったであろうことは想像に難くない。また合併すれば当然各村の財産は新町に帰属する。そこで当時の野田村の有力者達のなかで、野田村の保有している財産で、村民の帰属意識を保てる事業として戦没者の墓碑建立が企画されたのではない、というのが筆者の推理である。

企画の中心になった松井良一氏は、西野が新田として開かれた頃からの縁起を持つ旭照寺の檀家総代を長く務めた。⁽¹⁴⁾ 当然仏教界の動きにも強い関心を持っていたことと推察される。四天王寺住職の田村徳海氏らが発起人となった、旧真田山陸軍墓地の維持の動向について注目していたとしても不思議ではないであろう。1947年11月15日に、財団法人として「大阪靖国霊場維持会」が成立したことが一つのインパクトとなったものと思われる。

特に田村徳海氏は、当時の激動する仏教界にあっても注目される存在であった。1943年4月に青蓮院門主から四天王寺貫主に特命転任された田村徳海氏は、1945年3月14日の大阪大空襲で国宝を含む全山伽藍の殆んどを焼失するという困難に直面するが、1946年1月中世以来の天台宗の末寺という関係から離脱して「自由・民主の立場」から独立寺院として立つことで新しい時代に即応した四天王寺の再建をめざして、和宗総本山四天王寺管長大僧正として活躍していた。⁽¹⁵⁾ 1946年10月5日には、応急復興で竣工した四天王寺で時の吉田茂首相を迎えて、自由党近畿大会が開かれ地元の有力者が相当数参加した。その話題は野田村の有力者であった松井良一氏の耳にも届いていた可能性は強い。

こうした流れの中で、村の有力者たちの戦没者の墓碑建立については、遺族たちの多くが賛同した。しかし一部ではあれ、反対した人もいたと記憶されている。そこで次に、野田村の戦没者全体のなかで、旧真田山陸軍墓地に建碑されたのはどのぐらいの比重を占めるのか、なぜ反対があったのか、その配列はどうしたのかについて検討してみる。

3 旧真田山陸軍墓地の野田村墓碑

野田村の全戦没者数については、正確な統計が入手できていない。しかし、1950年4月1日登美丘町発足に際して当時の遺族会が作成した野田村の「日清・日露・日支・大東亜戦 戦死・病没者御芳名」に、238人の名簿が収録されている。⁽¹⁶⁾

旧真田山陸軍墓地に建立された野田村の全墓碑は169基だから、野田村の全戦没者が238人なら71%に相当する。しかし、地元での調査を進めるうちに、この名簿は1950年4月段階のもので、この名簿に収録されていない戦没者の存在も明らかになってきた。

そこで1996年頃に作成された「野田軍人墓地関係者一覧表」と、作成年次不詳の「登美丘軍人墓地」(名簿)及び1948年に真田山に建立された墓碑の解説した銘文によって、先の遺族会の名簿を補充したのが「南河内郡旧野田村 戦没死者名簿」である(表2)。野田村の墓碑は陸軍墓地内では一番新しかったが、村で作った石柱で損傷が激しく墓碑銘文も崩れて判読できない部分も少なくない。そのため一部は遺族会の名簿と照合できず、重複して掲載している可能性があるが、一応現在それも含めて判明した268人の旧野田村戦没者名簿を検討の対象とする。⁽¹⁷⁾

先ず戦没死亡の時期が判明したものを、年単位で集計したのが表3である。この内の6人は、15年戦争以前の戦没者だが、その内3人は真田山に墓碑が建立されており、従ってこれも除外せずに

表2 南河内郡旧野田村戦没者名簿

(1)

整理番号	戦没年月日	軍の階級	行年(歳)	戦没死亡場所	村の軍人墓地	真田山陸軍墓地	字名	出典
1	1895. 9. 20	陸. 一等卒		台湾〔□戦地□病院〕	N	1の74	南野田	遺族会名簿
2	1938. 4. 19	陸. 軍曹	26	山東省〔□荘ニ於〕	N	2の74	〃	〃
3	1939. 3. 7	陸. 上等兵	26	蘇州17師団第2野戦病院	N	2の76	〃	〃
4	1941. 3. 25			仏領印度支那			〃	〃
5	〃. 12. 3		50	中支徐州郊外豊財鎮			〃	〃
6	1942. 10. 18	陸. 上等兵	23	満州国奉天省岳城陸軍病院	N	1の77	〃	〃
7	〃. 3. 6			上海陸軍第一病院			〃	〃
8	〃. 8. 19			ニューギニア			〃	〃
9	1943. 1. 26		35	比島カラバン南島沖合			〃	〃
10	〃. 11. 3	海. 軍曹		外南洋方面夕霧内	N	2の70	〃	〃
11	〃. 12. 13			中支			〃	〃
12	1944. 8. 11		28	ビルマ方面	N		〃	〃
13	〃. 10. 14	海. 二等工作兵	24	台湾方面	N	2の80	〃	〃
14	〃. 2. 23		39	南方方面	N		〃	〃
15	〃. 7. 3	陸. 上等兵	22	黄海	N	1の82	〃	〃
16	〃. 9. 12	海. 二等工作兵曹	24	南支那海方面	N	2の73	〃	〃
17	〃. 12. 31	海. 一等機関兵曹	25	ソロモン群島方面	N	1の78	〃	〃
18	〃. 4. 22	陸. 兵長	34	ニューギニアホルランジャ	N	1の73	〃	〃
19	〃. 11. 3	陸. 上等兵	24	広西省靈川東南部岩山坪	N	2の82	〃	〃
20	〃. 8. 8			ビルマサウンザップ区トンヘ	N		〃	〃
21	〃. 10. 15		39	ソロモン群島			〃	〃
22	〃. 10. 26	陸. 上等兵	33	バシー海峡	N	2の72	〃	〃
23	〃. 6. 15	陸. 一等兵	28	陸軍病院〔大阪陸軍病院〕	N	2の75	〃	〃
24	1945. 7. 15		26	フィリピン			〃	〃
25	〃. 8. 13		22	満州牡丹江省	N		〃	〃
26	〃. 2. 26	陸. 曹長	25	ルソン島マニラ河バンパ西方		1の72	〃	〃
27	〃. 4. 1	陸. 兵長	23	フィリピンルソン島	N	1の83	〃	〃
28	〃. 2. 17	陸. 中尉	37	フィリピンコレヒドール島		2の78	〃	〃
29	〃. 3. 4	陸. 軍曹	31	広東省曲江県皇墟	N	1の76	〃	〃
30	〃. 3. 20	陸. 伍長	24	ビルマ	N	2の77	〃	〃
31	〃. 6. 29		34	河北省無点鏢	N		〃	〃
32	〃. 2. 5	陸. 伍長	32	ニューギニアウェワーク島	N	1の70	〃	〃
33	〃. 5. 29	陸. 兵長	30	ミンダナオ島ブーキノ州バリオ		1の79	〃	〃
34	〃. 7. 5	陸. 上等兵	30	ミンダナオ島		1の80	〃	〃
35	〃. 2. 5	陸. 曹長		ニューギニア島セブ州ムビアン		1の81	〃	〃
36	〃. 2. 11			濠北モロタイ水道			〃	〃
37	〃. 4. 21		47	奉天陸軍病院			〃	〃
38	〃. 7. 24		32	ビルマ			〃	〃
39	〃. 7. 24			ビルマ			〃	〃
40	〃. 12. 2		30	バトバハ沖			〃	〃
41	〃. 6. 20	陸. 〔兵長カ〕	30	ルソン島	N	1の75	〃	〃
42	〃. 1. 12	陸. 上等兵	20	南方洋上	N	2の71	〃	〃
43	〃. 6. 1		30	比島ミンダナオ島			〃	〃
44	1898. 10. 12			台湾兵站病院	N		北野田	〃
45	1912. 3. 7		22	陸軍病院	N		〃	〃
46	1939. 1. 30			北満			〃	〃
47	1938. 11. 2	陸. 伍長	21	中支	N	2の54	〃	〃
48	1939. 8. 30	陸. 上等兵	21	中支湖北省淳道	N	1の58	〃	〃
49	1941. 3. 30			北支山西省			〃	〃
50	〃. 11. 17	陸. 一等兵	27	満州国安東省		2の68	〃	〃

(2)

整理番号	戦没年月日	軍の階級	行年(歳)	戦没死亡場所	村の軍人墓地	真田山陸軍墓地	字名	出典
51	1942. 3. 25		30	アンダマン群島チャタム島			北野田	遺族会名簿
52	〃. 8. 25		23	東太平洋			〃	〃
53	1943. 11. 12	陸. 伍長	27	ニューギニア	N	2 の57	〃	〃
54	〃. 12. 6	陸. 兵長	29	東部ニューギニア	N	1 の65	〃	〃
55	〃. 11. 2	陸. 兵長	28	東部ニューギニアマダダン	N	2 の67	〃	〃
56	〃. 10. 6	海. [軍曹カ]		南太平洋	N	2 の65	〃	〃
57	〃. 5. 29	陸. 兵長	24	アッツ島		1 の63	〃	〃
58	1944. 8. 4		39	父島附近			〃	〃
59	〃. 1. 17		20	ソロモン群島			〃	〃
60	〃. 7. 28		25	ビルマホトフイト			〃	〃
61	〃. 11. 17		22	南西諸島方面			〃	〃
62	〃. 7. 25		32	ビルマ	N		〃	〃
63	〃. 9. 16	海. [機関二等兵曹カ]	25	太平洋	N	1 の61 [カ]	〃	〃
64	〃. 6. 5	陸. 兵長	34	ニューギニア	N	1 の68	〃	〃
65	〃. 4. 22	陸. 兵長	35	南部ニューギニア島ホルランジャー	N	2 の59	〃	〃
66	〃. 2. 18	海. 二等兵曹	25	南洋群島方面	N	1 の64	〃	〃
67	〃. 4. 22			ニューギニア			〃	〃
68	〃. 5. 4		17	東支那海			〃	〃
69	〃. 9. 12	海. 上等水兵	23	南支那海	N	1 の53	〃	〃
70	〃. 9. 16	陸. 兵長	35	マレー半島	N	1 の54	〃	〃
71	〃. 9. 14	陸. 伍長	25	比島レイテ	N	2 の63	〃	〃
72	〃. 6. 19		23	ビルマ			〃	〃
73	1945. 4. 29		24	西南諸島			〃	〃
74	〃. 2. 13		25	金岡陸軍病院			〃	〃
75	〃. 7. 5			比島リザルモンタルバン			〃	〃
76	〃. 8. 8		35	日本海	N		〃	〃
77	〃. 8. 21		28	香港九竜地区	N		〃	〃
78	〃. 5. 4	陸. 兵長	22	中部沖縄	N	2 の56	〃	〃
79	〃. 5. 20	海. [水兵長カ]	28	比島レイテ島カンギボフト附近	N	2 の58	〃	〃
80	〃. 3. 7		36	九州済生回 [会カ] 病院			〃	〃
81	〃. 6. 20	陸. 兵長	23	レイテ島	N	2 の53	〃	〃
82	〃. 6. 2	陸. 曹長	25	沖縄	N	1 の62	〃	〃
83	〃. 12. 14	陸. 上等兵	35	中支	N	2 の62	〃	〃
84	〃. 8. 5	陸. 曹長	28	比島ミンダナオ	N	2 の61	〃	〃
85	〃. 8. 28	陸. 一等兵	21	宮城県第一病院	N	1 の57 [カ]	〃	〃
86	〃. 6. 20	陸. 兵長	25	沖縄本島	N	1 の66	〃	〃
87	〃. 10. 12	陸. 兵長	22	中支	N	1 の59	〃	〃
88	〃. 6. 20			沖縄			〃	〃
89	〃. 6. 30	陸. 兵長	20	中国湘南省	N	1 の69	〃	〃
90	〃. 8. 8	陸. 軍曹	36	日本海		1 の56 [カ]	〃	〃
91	〃. 6. 5		38	比島ルソン島	N		〃	〃
92	〃. 6. 20		50	沖縄			〃	〃
93	〃. 1. 12		29	帰郷死亡	N		〃	〃
94	〃. 4. 1		36	東支那海			〃	〃
95	1946. 3. 17	陸. 上等兵	24	レイテ島ガンギボット山	N	2 の66	〃	〃
96	〃. 3. 29		33	タイシェット			〃	〃
97	1949. 2. 27		37	戦病死			〃	〃
98	1939. 12. 22		32	広東省センエントミム村高地			丈 六	〃
99	〃. 7. 17	陸. 伍長	27	山西省井城県嶺海	T	1 の7	〃	〃
100	1942. 5. 29		32	仙頭	N		〃	〃

(3)

整理番号	戦没年月日	軍の階級	行年(歳)	戦没死亡場所	村の軍人墓地	真田山陸軍墓地	字名	出典
101	1942. 12. 30	陸. 中尉	29	安□省大湖県四面夾附近	T	1の11	丈 六	遺族会名簿
102	〃. 12. 24	陸. [上等兵カ]	30	ニューギニア		2の1	〃	〃
103	1943. 5. 8	海. 一等□兵	30	不明(□□陸軍病院)	N	2の10	〃	〃
104	〃. 10. 3		32	南方			〃	〃
105	1944. 9. 12	陸. 伍長	29	中部フィリピン	T	1の9	〃	〃
106	〃. 7. 4	海. 上等水兵	22	トラック島	N	2の11	〃	〃
107	〃. 11. 9			モロタイ島			〃	〃
108	〃. 10. 16	海. 上等工作兵	32	レイテ島		2の4	〃	〃
109	〃. 6. 11	陸. 兵長	24	ニューギニア	T	1の1	〃	〃
110	〃. 6. 3	陸. 衛生兵長	24	ニューギニア		1の8	〃	〃
111	〃. 11. 25	海. 上等工作兵曹		比島方面	T	1の4	〃	〃
112	〃. 2. 28		36	ニューギニアマーク西北海上	T		〃	〃
113	〃. 7. 8	陸. 兵長	21	湖南省	T	2の9〔カ〕	〃	〃
114	1945. 6. 20		22	沖縄島摩文仁			〃	〃
115	〃. 4. 10	陸. 兵長	35	沖縄	N	2の12	〃	〃
116	〃. 8. 11	陸. 曹長	30	満州牡丹江		2の84	〃	〃
117	〃. 2. 2		20	南太平洋			〃	〃
118	〃. 3. 20			ビルママランショウ			〃	〃
119	〃. 3. 10	陸. 中尉	24	ビルママンダレー王城	T	2の6	〃	〃
120	〃. 9. 14	陸. 上等兵	24	九州病院〔福岡陸軍病院カ〕		1の2	〃	〃
121	〃. 3. 26	陸. 伍長	26	河北省療県大井口		2の7	〃	〃
122	〃. 2. 9	陸. 兵長	24	ビルマ	T	1の3	〃	〃
123	〃. 7. 15	陸. 伍長	29	比島ミンダナオ島ミサミス州	T	2の69	〃	〃
124	〃. 6. 30	海. 兵長	35	比島	T	1の5	〃	〃
125	〃. 4. 7	海. □□	19	沖縄方面近海	T	2の2	〃	〃
126	〃. 6. 8	陸. 兵長	24	西部ニューギニアサマライ島ママテ	T	2の3	〃	〃
127	〃. 1. 12	陸. 一等兵	20	東南アジア	T	2の5	〃	〃
128	〃. 4. 24	海. 兵長		比島ルソン島	T	2の8	〃	〃
129	〃. 5. 10		34	フィリピンルソン島			〃	〃
130	〃. 7. 10	陸. 中尉		比島		1の84	〃	〃
131	1905. 5. 2	陸. 上等兵	27	奉天兵站病院〔広島陸軍病院〕	T	2の31	高 松	〃
132	1919. 12. 21	陸. 一等兵		大阪陸軍病院		2の41	〃	〃
133	1937. 10. 19	陸. 上等兵	22	支那地と南方高地	T	2の48	〃	〃
134	1938. 7. 11		36	中国山西省	T		〃	〃
135	〃. 11. 26		25	朝鮮竜山陸軍病院	T		〃	〃
136	〃. 11. 12	陸. 上等兵		中支方面	T	1の50〔カ〕	〃	〃
137	1939. 5. 5	陸. 上等兵	21	中支	T	2の36	〃	〃
138	〃. 12. 29	陸. 上等兵	25	北支	T	2の32	〃	〃
139	1940. 6. 25	陸. 上等兵	25	〔中華民国 □□〕		2の43	〃	〃
140	1941. 1. 20	陸. 兵長	24	中支	T	2の42	〃	〃
141	〃. 12. 13	陸. 兵長	24	不明〔中華民国 □□〕	T	2の30	〃	〃
142	1942. 9. 28		22	ニューギニア			〃	〃
143	〃. 11. 29	陸. □□		ニューギニア	T	1の45	〃	〃
144	〃. 9. 6	陸. 上等兵	22	中支		1の43	〃	〃
145	〃. 11. 23	陸. 一等兵	23	中支広東	T	1の40	〃	〃
146	〃. 12. 18		34	ニューギニア			〃	〃
147	1943. 2. 7	陸. 上等兵	23	ラバウルニューギニア	T	1の31	〃	〃
148	〃. 1. 7	陸. 上等兵	48	ニューギニア	T	1の49〔カ〕	〃	〃
149	〃. 8. 19	海. 水兵長		外南洋方面	T	1の51	〃	〃
150	〃. 1. 21		32	ニューギニア			〃	〃

(4)

整理番号	戦没年月日	軍の階級	行年(歳)	戦没死亡場所	村の軍人墓地	真田山陸軍墓地	字名	出典
151	1943. 1. 11	陸. 伍長	29	南海方面		1 の39	高 松	遺族会名簿
152	1944. 9. 1	陸. 上等兵	24	トラック島	T	2 の50	〃	〃
153	〃. 10. 26	海. 一等兵曹	25	太平洋	T	2 の47	〃	〃
154	〃. 8. 7	陸. 		ニューギニア		1 の30	〃	〃
155	〃. 7. 18	陸. 伍長	23	サイパン島		1 の32	〃	〃
156	〃. 9. 28	陸. 伍長	28	中支方面〔湖南省 〕	T	2 の29	〃	〃
157	〃. 2. 25	海. 一等兵曹	25	比島沖	T	1 の37	〃	〃
158	〃. 11. 23	陸. 兵長	29	南方〔レイテ島 〕	T	2 の28	〃	〃
159	〃. 12. 20	陸. 伍長		レイテ島	T	1 の42	〃	〃
160	〃. 9. 14		24		T		〃	〃
161	〃. 6. 9	海. 一等兵曹	26	比島方面		1 の34	〃	〃
162	〃. 7. 21	陸. 兵長	29	ビルマ		2 の46	〃	〃
163	〃. 10. 25			ソロモン島	T		〃	〃
164	〃. 8. 9			東支那海	T		〃	〃
165	〃. 9. 14	陸. 〔上等兵カ〕		黄海方面	T	1 の38	〃	〃
166	〃. 9. 14			南洋			〃	〃
167	〃. 5. 20	陸. 伍長	31	ニューギニア	T	1 の52	〃	〃
168	〃. 7. 8			サイパン			〃	〃
169	〃. 12. 6			ベシー〔バーシーカ〕海峡北方			〃	〃
170	〃. 6. 10		31	東部ニューギニア	T		〃	〃
171	1945. 11. 3	陸. 兵長	38	北朝鮮	T	2 の39	〃	〃
172	〃. 5. 19	陸. 軍属		比島イサベラ州マスガン		1 の33	〃	〃
173	〃. 5. 25	陸. 伍長		ミンダナオ島オモナイ		2 の49	〃	〃
174	〃. 8. 3	陸. 兵長		フィリピン	T	2 の37〔カ〕	〃	〃
175	〃. 6. 20	陸. 伍長		沖縄本島	T	1 の29	〃	〃
176	〃. 8. 11	陸. 伍長	32	〔比島 〕バデブロン山西方〕	T	2 の45	〃	〃
177	〃. 3. 7	陸. 伍長	25	フィリピン	T	2 の44	〃	〃
178	〃. 5. 12	海. 整備兵長	22	比島西方	T	1 の36	〃	〃
179	〃. 6. 30	陸. 伍長	24	比島方面	T	1 の35	〃	〃
180	〃. 2. 4	陸〔カ〕. 兵長	26	ルソン島	T	1 の46	〃	〃
181	〃. 2. 7	陸. 兵長		湖南省零陵丘竝病院	T	1 の44	〃	〃
182	〃. 3. 29		36	千葉県館山砲術学校			〃	〃
183	〃. 7. 1		22	南方レイテ島	T		〃	〃
184	〃. 5. 1		23	ルソン島ヌエバビスカヤ州			〃	〃
185	〃. 6. 6			熊本沖輸送船内			〃	〃
186	〃. 5. 23		32	沖縄本島	T		〃	〃
187	〃. 7. 24	陸. 伍長		ビルマキンザ東方	T	2 の33	〃	〃
188	1946. 9. 15	陸. 兵長		朝鮮コモウ山	T	2 の40	〃	〃
189	〃. 3. 4	陸. 兵長	32	中支第175病院	T	2 の35	〃	〃
190	〃. 6. 22		30	中支	T		〃	〃
191	1952. 3. 27		21	ソ連シベリア太人治州	T		〃	〃
192	1957. 11. 11		21	ソ連イルクーツク病院	T		〃	〃
193	1939. 3. 10	陸. 上等兵	24	ホルステン河畔イサンギン台附近		2 の21	西 野	〃
194	1940. 4. 19	陸. 上等兵	27	北支小西省水県上	N	2 の18	〃	〃
195	1942.		25	フィリピンバターン半島			〃	〃
196	〃. 7. 1	陸. 上等兵	22	中支		1 の24	〃	〃
197	1943. 12. 27	海. 軍属	19	支那海方面〔南支那海〕	N	1 の25	〃	〃
198	1944. 8. 17	陸. 兵長	23	ビルマ国モーライククレワ	N	2 の17	〃	〃
199	〃. 5. 5		20	ニューギニア			〃	〃
200	〃. 6. 10		32	中支漢口	N		〃	〃

(5)

整理番号	戦没年月日	軍の階級	行年(歳)	戦没死亡場所	村の軍人墓地	真田山陸軍墓地	字名	出典
201	1944. 10. 10		18	南洋諸島			西 野	遺族会名簿
202	〃. 12. 8	陸. 兵長	40	中国湖南省	N	2 の19	〃	〃
203	〃. 10. 11	陸. 上等兵	26	中支衡陽〔衛陽〕	N	1 の19	〃	〃
204	〃. 9. 21	海. 上等兵	37	フィリピン	N	1 の21	〃	〃
205	〃. 12. 7	陸. 兵長	23	ボーゲンビル島	N	1 の23	〃	〃
206	〃. 10. 26		19	南太平洋			〃	〃
207	〃. 9. 15	陸. 一等兵	27	中支	N	1 の22	〃	〃
208	〃. 2. 26		32	ニューギニア			〃	〃
209	〃. 2. 24		30	南洋群島ブラウン島			〃	〃
210	〃. 5. 27		36	ニューギニアゲニモ			〃	〃
211	〃. 11. 20	陸. 上等兵	36	レイテ島西方海域	N	1 の28	〃	〃
212	1945. 5. 30	陸. 中尉	28	比島ネグロス島	N	2 の26	〃	〃
213	〃. 3. 29	陸. 伍長	27	比島ルソン島アンチボロ	N	2 の27	〃	〃
214	〃. 4. 24	海. 上等水兵	38	フィリピンマラシクラーク地区	N	1 の15	〃	〃
215	〃. 4. 1	陸. 兵長	23	比島	N	2 の85	〃	〃
216	〃. 2. 10	陸. 伍長	22	中支〔湖北省□□病院〕	N	2 の14	〃	〃
217	〃. 6. 20	陸. 軍曹	33	沖縄島	N	1 の14	〃	〃
218	〃. 4. 22	陸. 上等兵	34	ニューギニア	N	1 の16	〃	〃
219	〃. 6. 30	陸. 兵長	25	比島レイテ島カンギボット山	N	2 の20	〃	〃
220	〃. 1. 18		23	台湾沖			〃	〃
221	〃. 2. 23			フィリピン			〃	〃
222	〃. 7. 14	陸. 伍長	33	ルソン島	N	2 の24	〃	〃
223	〃. 3. 21		25	蒙古李家庄			〃	〃
224	〃. 6. 30	海. 兵曹	38	レイテ湾		1 の18	〃	〃
225	〃. 4. 24		37	比島方面			〃	〃
226	〃. 6. 12		32	金岡陸軍病院			〃	〃
227	〃. 4. 5		31	比島マニラ			〃	〃
228	〃. 7. 30	陸. 伍長	27	マニラ		2 の16	〃	〃
229	〃. 2. 20	海. 二等兵曹	21	ミンダナオ島	N	1 の17	〃	〃
230	〃. 9. 5	陸. 上等兵	37	満州遼陽陸軍病院	N	2 の15	〃	〃
231	〃. 8. 23		21	比島マニラ			〃	〃
232	〃. 2. 26	海. 水兵長	23	比島マニラ	N	2 の25	〃	〃
233	〃. 7. 15		26	フィリピン			〃	〃
234	1946. 3. 28	陸. 上等兵	22	湖南省衡陽県68野戦病院		1 の20	〃	〃
235	〃. 3. 17		39	ソ連チタ地区モロドイ収容所	N		〃	〃
236	〈 〃. 2. 12〉		36	〈野田村西野の自宅〉	N		〃	〃
237	〈 1944. 9. 13〉	陸. 兵長		〈朝鮮木浦沖海上〉	N	2 の22	〃	〃
238				コスモリススク収容所			〃	〃
239	1944. 11. 15	陸. 軍属	31	ニューギニア島	N	1 の6	丈 六	野田軍人墓地 関係者一覧表
240	1942. 4. 6	陸	24	比島ルソン島	N		大美野	〃
241	1948. 8. 20	陸	24	ソ連(病)	N		〃	〃
242	1944. 10. 27	海	34	フィリピン	N		草 尾	〃
243	〃. 6. 18	海	30	インド洋	N		〃	〃
244	1928. 12. 4	陸			N		〃	〃
245	1946. 1. 18	陸. 伍長		ソ連ハバロスク病院		1 の10		真田山墓碑銘文
246	〔1942. 7. 12カ〕	陸. 上等兵		満州新京陸軍病院		1 の12		〃
247	1945. 3. 30	陸. 兵長		中華民国湖□省		1 の13		〃
248	1944. 6. 10	海. 一等機関兵		中支漢口ニ於戦死		1 の26		〃
249	□□□□	陸. 中尉		中華民国□□□□		1 の27		〃
250	□□□□	陸. 一等兵		□□□□□□		1 の55		〃

(6)

整理番号	戦没年月日	軍の階級	行年(歳)	戦没死亡場所	村の軍人墓地	真田山陸軍墓地	字名	出典
251	1945. 5. 19	陸. 上等兵		比島ミンダナオ島〔カ〕		1の60		真田山墓碑銘文
252	〔 〕	陸. 兵長		〔 〕		1の67	北野田	〃
253	1945. 4. 16	陸. 伍長		比島ルソン島バギオ〔カ〕		1の71	南野田	〃
254	〃. 12. 1	陸. 上等兵		中華民国〔 〕		2の13		〃
255	〃. 3. 1	陸. 曹長		ビルマ国ベク〔 〕ニ於		2の23		〃
256	1946. 〔 〕	陸. 兵長		〔 〕		2の34		〃
257	1945. 〔 〕	陸. 上等兵		大阪陸軍病院		2の38		〃
258	〔 〕	陸. 兵長		〔 〕		2の51		〃
259	〔 〕. 8. 25(カ)	陸. 軍曹		〔 〕		2の52		〃
260	〔 〕	海. 上等兵		〔 〕		2の55		〃
261	1944. 3. 12(カ)	陸. 中尉		〔 〕		2の60		〃
262	1945(カ) 〔 〕	海. 上等兵		〔 〕		2の64		〃
263	1946. 6. 25	陸. 伍長		シベリア〔 〕病院		2の79		〃
264	1944. 8. 11	陸. 上等兵		ビルマ方面ニ於		2の81		〃
265	〃. 7. 26	陸. 伍長		ビルマ国スレン於		2の83		〃
266	〔 〕	陸. 伍長〔カ墨書〕		〔 〕		1の41		〃
267	〔 〕	海. 一等〔 〕		〔 〕		1の47		〃
268	〔 〕	〔陸〕〔墨書, 海軍一等機関兵カ〕		〔 〕		1の48		〃

出典と註①整理番号1～238は、野田村遺族会作成「日清・日露・日支・大東亜戦 戦死・病没者 御芳名」のうち、氏名と戒名を除き収録し、村の軍人墓地と真田山陸軍墓地の墓碑の有無を付記した。整理番号239～244は「野田軍人墓地関係者一覧表」（野田軍人墓地会作成）で野田村遺族会作成の名簿に掲載されていない6人分を、氏名、法名、遺族関係を省略して収録した。整理番号245～268は、上記の名簿に収録されていないが、真田山陸軍墓地に墓碑が建立されている24人分を、墓碑銘文によって採録したが、氏名は省略した。なを全般にわたり「登美丘軍人墓地」（名簿）によって確認をした。

②戦没年月日は和暦表示を西暦表示に改めた。

③軍の階級は真田山陸軍墓地の墓碑銘文によるが、一部は他の名簿によったものもある。「陸、海」は陸軍、海軍の略表記で、階級は出典に従った。但し整理番号は268は、遺族会役員が判読しにくかったものに墨で加筆して「陸軍」としているが「海軍一等機関兵」と筆者は判読した。266, 267, 268は氏名も判読できなかった。

④〔 〕は文字の判読できない箇所を、〔 〕は文字があると推定されるが、有無も確認できなかった箇所を、〔カ〕は墓碑銘文の推定判読箇所を、〈 〉は「野田軍人墓地関係者一覧表」からの補充を示す。

⑤村の軍人墓地は、南野田、北野田、西野を主に範囲とする野田軍人墓地を N で、高松、丈六を主に範囲とする登美丘（高松）軍人墓地を T で表示した。

⑥真田山陸軍墓地に墓碑が建立されている169人分は、図2配置図に照合する番号を記した。通路側の「南河内郡野田村遺族会」の石碑のある側から第1基、第2基と数え、その前に西側を1列、東側を2列目と表示した。従って1の1は1列の第1基、2の10は2列の第10基の墓碑を表示する。

⑦字名は基本的には名簿によるが、一部は遺族会関係者の記憶で補った。

一括した。ところで戦没者の年別に、そのどれだけが真田山に墓碑を建立されたかを見ると、全体では268人中の169人なので建碑率は63.1%になる。そのうち15年戦争の前期（1941年頃迄）が平均建碑率を5ポイント上廻っていることが目につく。戦没者が未だ少数だった時期、戦没者は「名誉の戦死」として盛大な葬儀が村を挙げて営まれていた。そのことの記憶が、村を挙げての真田山への墓碑建立に投影されたのではないかと思われる。戦後期は、建碑されたのが1948年なので、それ以後に戦病死やそれが確認された3人は母数に入れるのはおかしいので、3人を差し引いた建碑率を〈 〉に表示した。しかし全般的にみて、1937～1948年間では特に大きな差異はみられない。1928年以前の建碑率が一番低いが、母数が6人と少ないのでここでの分析は省略する。

次に野田村の字別の名簿の人数と真田山の墓碑数、地元軍人墓碑数をまとめたのが表4である。この碑の建立された時期と名簿の作成された時期を、時間順に並べると次の様になる。

1948年9月24日 旧真田山陸軍墓地に野田村

遺族会が169基の墓碑建立

1950年4月 野田村が合併して消滅するに際し、遺族会が名簿作成

1950年 この年頃野田村軍人墓地を、北野田駅前西側の土地の無償貸与をうけて造成する。

1952年 この年頃高松共同墓地の一角に登美丘軍人墓地を造成する。

1991年5月 この頃登美丘軍人墓地、広場を半分売って整備。同時期その名簿が作成されたものと推定される。

1997年6月 北野田駅前再開発事業で、野田軍人墓地は南へ移転。そのためこれ以前に「野田軍人墓地関係者一覧表」作成される。

真田山と地元の軍人墓地では、数年も建碑の時期は開いていない。しかし地元の軍人墓地の方が野田村全体で8ポイントも低くなっているのは、既に真田山にまとめて造ったという意識もあった

表3 野田村年別戦没者数

年次（和年号）	戦没者数（内真田山建碑者）	小計
1895（明治28）	1（1）	6（3） 建碑率50.0%
1898（明治31）	1	
1905（明治38）	1（1）	
1912（明治45）	1	
1919（大正8）	1（1）	
1928（昭和3）	1	22（15） 〃 68.2%
1937（昭和12）	1（1）	
1938（昭和13）	5（3）	
1939（昭和14）	8（6）	
1940（昭和15）	2（2）	
1941（昭和16）	6（3）	215（135） 〃 62.8%
1942（昭和17）	17（8）	
1943（昭和18）	16（12）	
1944（昭和19）	77（47）	
1945（昭和20）	105（68）	
1946（昭和21）	11（7）	15（7） 〈 〃 58.3%〉
1947（昭和22）	0	
1948（昭和23）	1	
1949（昭和24）	1	
1950（昭和25）	0	
1952（昭和27）	1	10（9）
1957（昭和32）	1	
戦没死亡年不明	10（9）	10（9）
合 計	268	建碑率63.1%（169）

出典：表2から作成。

表4 字別軍人墓地建碑数と建碑率

字 名	戦没者名簿	真田山（建碑率）	地元軍人墓地 野田 登美丘（地元建碑率）
南野田	44	25（56.8）%	24（54.5）%
北野田	55	28（50.9）	31（56.4）
丈 六	34	25（73.5）	5 15（58.8）
高 松	62	42（67.7）	43（69.4）
西 野	46	27（58.7）	25（54.3）
不明・他	27	22（81.5）	5（18.5）
合 計	268	169（63.1）	90 58（55.2）

出典：表2から作成。

であろうが、戦後数年たって戦没者への新たな追悼の動きに対し、目前の生活を優先する考えが台頭してきたことを推定させる。この比較を通して、むしろ戦後すぐの1948年に、遺族会が作った名簿を補足した268人の戦没者の63.1%もの遺族の同意をとりつけて真田山に、建碑したことのエネルギーと村の熱意が大変なものであったことを考えさせられる。

字別に見てゆくと、真田山では丈六と高松の建碑率が高く、地元の軍人墓地でも順位は入れ替るが高松、丈六が高率になっている。しかしここでは、逆に建碑率が低かったところに注目し、何故村を挙げての建碑運動に参加しなかった人がいたのか、を分析してみたい。真田山で建碑率が低かった順は、北野田50.9%、南野田56.8%、西野58.7%で、地元軍人墓地の場合でも西野54.3%、南野田54.5%、北野田56.4%と順は入れ替るが、この3つの字が村全体の建碑率の平均を下廻っている。

当時不参加を決めた遺族の話を直接伺えれば一番明瞭に確かめられるが、その時に不参加の決断をした遺族の多くは既に物故されており、ご存命でもプライバシーに深くかかわるこのテーマでの聞きとりは憚られる。そこで間接的に傍証から考察してみる。建碑率の低かった南野田、北野田、西野は、いずれも南海線北野田駅に近く、高松・丈六よりも様々な情報が伝わり易く、物事の判断を下すにあたり共同体的規制がよりゆるやかであったであろうことは、立地条件から推論される。野田村の中では商業の比率も高く、人の移動も多かった地域といえるであろう。

また、先に見た野田村の概況で触れたが、西野から丈六にかけては高級住宅街が形成されており、都市部から移り住んだ住民の中には、必ずしも野田村に愛着を持って共同の建碑事業に協賛する考えの人ばかりではなかったことも推定される。この高級住宅街とは別に、沢田正二郎と並んで新国劇をつくり上げてきた倉橋仙太郎が結核に倒れてその後療養のため西野に移り住んで、1923年（大正12）3月には「新文化村」の建設の運動を開始していた。この「新文化村」運動を掘りおこして位置づけた北崎豊二氏は、次の様にまとめている。⁽¹⁸⁾

仙太郎は新文化村に「民衆大学」として、社会主義講座や社会問題講座を開いたが、それに水平社の西光万吉や阪本清一郎らを招き、新文化村のものはもとより、周辺の村の農民にも水平運動や社会主義についての理解を深めるように努めた。民衆学校や民衆劇団（第二新国劇）は存在期間こそ短かったが、そこから大河内伝次郎・原健策・金井修・金剛麗子らの俳優を生んだほか、劇団の公演活動において、被差別部落民や農民組合員の支持を得、部落解放運動との結びつきを深め、それらの発展にも貢献した。したがって、新文化村は、武者小路実篤の「新しき村」ほど有名ではないが、その存在意義は大きい。

倉橋仙太郎の呼びかけに共鳴した文化人・芸術家らが、仙太郎の考案した合理的な「新文化村住宅」に住みつき、西野から野田村に新しい空気が広がったことは間違いない。移り住んだ中には、社会主義者、社会運動家として活躍した難波英夫もいて、部落解放と社会主義を主張する『ワシラノシンブン』を創刊した。⁽¹⁹⁾

表5 旧野田村の農地改革

年 度	買 件数	収 面積	売 件数	渡 面積
		反 歩		反 歩
1946	12	17,521	19	17,521
1947	79	633,404	341	613,209
1948	118	73,223	135	60,721
1949	32	49,906	41	49,906
1950	9	15,526	15	16,704
1951	5	8,712	27	11,823
1952	3	6,922	1	1,125
合 計	259	805,515	579	771,219

出典：『登美丘町史』52頁表から一部引用

こうした土壌の上に、1946年2月と9月に農地改革が進行した。表5に旧野田村の農地改革の進行を示す統計を引用したが、真田山への建碑事業がとりくまれた1947～48年は、買収・売渡しもに最も動きが大きかった年であり、従来の価値観が大きく崩れた時期と重なっている。

これらの要素が総合して、遺族の中でも建碑事業に不参加の意志表示をする人々が出現したものと考えられる。ただその場合も、個人としての不参加であって、遺族会が村を挙げて進めようとする建碑事業そのものには反対していない。このことは、戦後間もなくで敗戦による価値観の混乱はあっても、直接・間接の戦争体験者として戦没者に対する哀悼の意を建碑事業という形で示すことに反対しないという共通意識が汎く存在していたことを窺わせる。

なお表4に集計された「不明・他」の27人についてみておきたい。真田山の建碑の1年半後に作成された遺族会の名簿に収録された238人以外に、真田山に墓碑が建立された人が25人（うち3人は氏名が判読できないので遺族会名簿に重複して収められている可能性もある）、さらに遺族会の名簿に収録されていないが野田軍人墓地関係者一覧表に名前が登場する人が6人いる。そのうち字名が判明しない人と他村にいる人が27人になる。このうち22人が真田山に碑を建てられていることから、名簿作成前には野田村に住んでいてその後転出した人、つまり22人が疎開して来ていた人の可能性が高い。事実、このうちの判明した2例については疎開していたことが確認できた。この内容については、後に具体例をとりあげてみる。

続いて真田山に建立された墓碑の配列を検討するため、表2と関連して作成したのが図10である。

この配置図で明らかになることは、1列目と2列目が向かい合わせに建てられているがそれを北から南へと、丈六・西野・高松・北野田・南野田と字別でブロックに区切っていることであろう。さらにその内部をみると、陸軍と海軍、将校と下士官、兵士の墓碑が一貫性がなく混在している。旧真田山陸軍墓地は、他に海軍の墓碑はなく、また将校、下士官、兵士が整然と区画を別にしていただけに、野田村のこの特異性は際立っている。特に将校、下士官、兵士は、規定により規模に大小の差があるが、野田村のものは全部兵士の規格で、基壇の部分が一般の兵士の規格の約4分の1しかない。また行政文書では字名を書くにあたっては大体決まった順番があり、遺族会の名簿もそれを踏襲している。南野田、北野田、丈六、高松、西野というその順と、墓碑の順番は違っている。

この基壇が小さいのは、前に聞きとりからわかったように戦没死者の遺骨を埋葬するというより、記念品を納めるためであったからであろう。また規格を同一にしたのは、遺族会が村の応援を得て事業として進めるためには、兵士の遺族を含む全体の同意が不可欠だったからと考えられる。

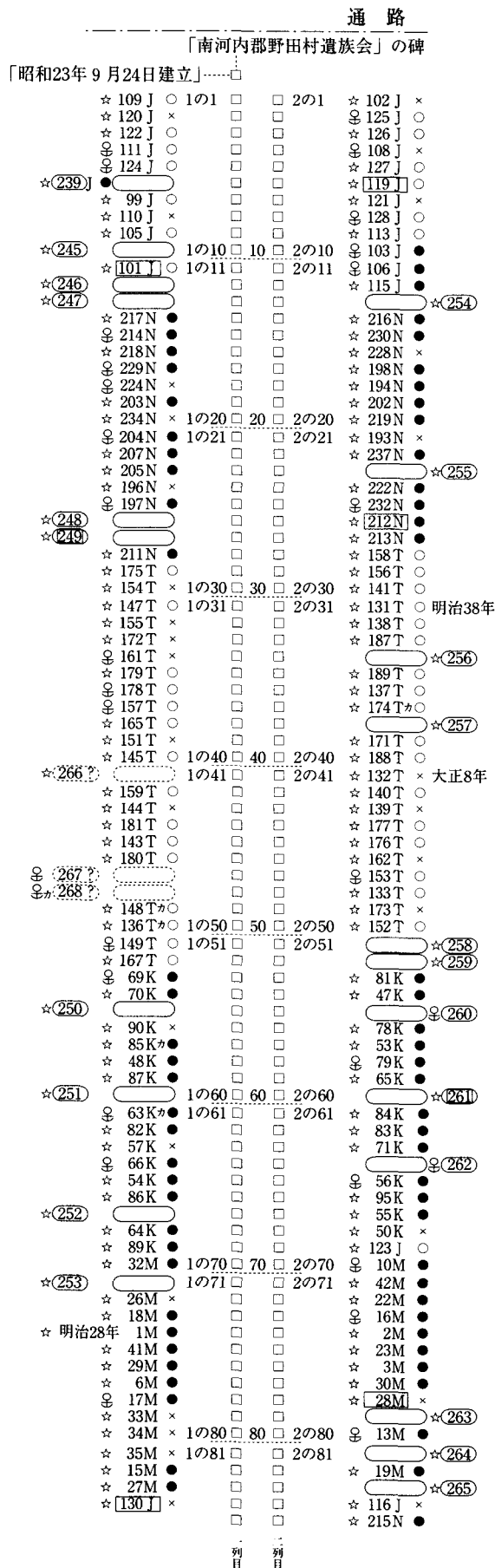
配列については、地元の野田軍人墓地の1997年の移転に際し、抽籤で位置を決めたということだったが、恐らくはこの時もそうしたのではないかと推定すると納得できる。字毎の順番も同様だったのであろう。

4 真田山での祭祀について

こうして建立された169基の墓碑は、遺族にとって現在どのような存在になっているかを続いて検討してみる。

初めに現在も旧野田村の西野に住んでいる木村和子氏からの聞きとりの一部を紹介する。⁽²⁰⁾

私は1923年1月に大阪市内で生まれました。結婚した夫は大阪市の九条新道で商売をしていま



- ①旧野田村戦没死者名簿（表2）
の整理番号を、碑（□で表示）の左右に付記した。
その内側の1の1、2の10等の数字は
1列目の第1基目、2列目の第10基を示す。
- ②整理番号の右の記号は、次の略号である。
J = 丈六
N = 西野
T = 高松
K = 北野田
M = 南野田
● = 野田軍人墓地に碑のあるもの
○ = 登美丘軍人墓地（高松）
× = 地元の軍人墓地に碑のないもの
- ③整理番号を□でかこんだものは将校を示す。
- ④戦没年が明治、大正期のものは、整理番号の左右に表記した。
- ⑤整理番号を□と空欄にし、位置を左右にずらして表示したものは、野田村遺族会作成の「戦死・病没者 御芳名」に氏名状見当らないもの。
- ⑥墓碑銘文が判読できないものは□?と表示した。
- ⑦整理番号の前の略号☆は陸軍を、♀は海軍を示す。
- ⑧1の85は基壇だけあって墓碑はない。
- ⑨墓碑銘文から推定したものは「カ」を付記した。

図10 南河内郡野田村遺族会建立の169基の墓碑配置図

して、一緒に働きました。1940年に主人の両親がここに土地を買い家を建てました。その直後の1940年4月19日、夫の長兄が中国で戦死しました。遺骨は主人の両親の出身地の和歌山に埋葬しました。夫は三男でしたが、1945年の大阪の大空襲で焼け出され、両親を頼って父母と同居しました。それ以来、ここに住み続けて今日に及んでいます。ですから、1948年に真田山に墓碑を建てるというお話は、両親がかかわっていたと思いますが、詳しい経過はわかりません。松井良一さんという大きな地主さんだった方達が一生懸命やっていたようです。なぜあんなに遠くにまつたのか、と思いましたが、三男の嫁ですし尋ねたことはありません。はじめの頃は村からそろってお参りに行ったとも聞きました。父は毎月19日には和歌山までお墓参りに行っていました。父母が亡くなってからは盆とお彼岸には和歌山に墓参に行くようにしています。家に仏壇があり、北野田駅前に軍人墓地が出来てからは、毎月19日にはここにお参りしています。ここでは共同の慰霊祭とかはしていません。お盆の前に草とりをするといった時に皆さんに通知して都合をつけた方々と一緒にするといった程度で、あとは皆さんが夫々に命日の日にお参りをしているようです。それから暫くして主人が遺族会の役員を引き受けて、主人が亡くなった後は私がお手伝いするようになりました。野田軍人墓地に行った時が、一番亡くなった義兄にお参りしている感じがします。真田山にはいつか行かなくては、と思いつつもなかなか行けてません。西野の文化村というのは、私の家の近くにもありました。倉橋仙太郎さんのお宅は、私の家の奥にありました。少し前迄は、学者や画家のいた階段の家が何軒か残っていました。

遺族会の役員もした木村和子氏にとっても、真田山の墓碑は気にかかるが遠い存在になっているようである。多くの遺族にとって、真田山の墓碑は実際の距離以上に遠い存在になりつつあるようである。そして遺族も次の世代になると、真田山は更に遠く意識からも脱落しつつある傾向もみられる。

一方戦時中野田村に疎開して、その後野田村を離れた遺族の場合はどうか。確認できた二例のうち、野田村を去る時期が早く遺族会が1950年4月に名簿を作る少し前に大阪市内に戻った小島崇右氏の場合、真田山に墓碑は建立されたが戦死した父の名は名簿に掲載されていない。もう一人は、野田軍人墓地が出来た頃迄南野田に居た場合だが、遺族会の名簿にも掲載され、野田軍人墓地にも建碑している。ここでは遺族会の名簿に掲載されていなかった小島氏の聞きとり⁽²¹⁾の一部を引用する。

私は大阪市内で1936年1月12日に生まれ、国民学校の3年生の頃に一家で疎開して野田村にきました。まだ大阪が空襲を受ける前でした。弟は集団疎開をしています。私は小さかったけれど、祖父が始めて父も継いでいた溶接の仕事を職人さんを使って一家でやっていた跡とりということで祖父母と父と一緒にでしたが、母は下の弟達と今の大東市のあたりに疎開しました。北野田駅のすぐ南側の東手に、疎開者を対象とした6軒長屋が何棟か建てられて、そこが手狭であったこともあるし、親と祖父母との関係で何かあったのかもしれませんが、母と離れて淋しい生活でした。転校した国民学校では「あ、新建^{しんだち}の……」といわれましたから、同じように疎開してきていた人が相当いたと思います。この南野田の長屋に父の召集令状が来ました。父は大阪市西淀川区から出征してゆきました。そして再び帰っては来ませんでした。1945年4月16日、フィリピンのルソン島で戦死したそうです。遺骨が帰ってきたのですが、おかしいことに

2度来しました。2度目の時、木の箱をこっそりあけてみました。何かが焼けたカケラのようなものが入っていました。この遺骨は、暫くしてから祖父母と母も来て皆で高野山に行って永代供養をしてもらいました。戦争が終って間もなく、新制中学の2年生の時に大阪市内に戻りました。祖父母と跡とりだということで私とで、熔接の仕事を再開しました。母は結局弟達と別のところで暮らして、日常の往来もなく、今もそのままです。私は高校に進学したいと言ったのですが、祖父は熔接の仕事に学歴はいらん、早く働くようにということで、定時制高校に1年程行ってやめました。職人さんを使って働くと、職人さんの来る前後に用意や片付けがあって、学校に通うのは無理がありました。父の墓は真田山にあると祖父母に連れられて盆と彼岸にお参りに来ました。祖父母が死んでからも、私にとっては、真田山にお参りした時に死んだ父を一番身近に感じています。今も欠かさず盆と彼岸にはお参りに来ています。2, 3日前に供えたお花をみると、母と弟達がお参りに来たのだと思います。真田山に父の墓碑を建てられた経過は全く知りませんでした。大阪市が旧軍の関係で造ってくれたのだとばかり思っていました。でも周辺でお参りする人が少ないとは感じていました。祖父が死んで暫くして真田山にお参りに来た時、以前連れられてお参りした時と位置が少し変って全体に奥の方に寄せられていたような気がします。私が生きているうちは真田山にお参りに来ようと思っていますが、子どもは娘1人で結婚していますし、私達夫婦は自分達だけで永代供養してくれるところに入って娘には世話にならない心算です。

小島氏の場合、地元の軍人墓地には関係がないため、真田山の墓碑が一番親しく戦死した父親を想う場、追悼する場になっているようであった。しかし真田山をそうした場として維持するために、戦後間もなくから財団法人大阪靖国霊場維持会や、地元の町自治会の方々等の献身的な努力、奉仕があったことについては全くご存知なく、「そういうことだったのですか」と何度も頷いておられた。しかしこうした想いは、次の世代に引き継がれる可能性は少なく、真田山に野田村遺族会によって建立された169基の墓碑の祭祀については、追悼の主体であるはずの旧野田村の戦没者の遺族の世代交代とともに、地元であると転出者であるとかかわらず、その意識から影が薄くなりつつあるように思われる。

おわりに

現在急速に変貌しつつある大阪近郊の大阪府南河内郡旧野田村の遺族会が、旧真田山陸軍墓地内に建てた169基の墓碑について、さらに地元建てた墓碑とも比較しながら一部推論を含みつつ現在まで判明したことを述べてきた。

ここではそれらをまとめて整理しておきたい。

- (1) 「大阪府南河内郡野田村遺族会」という一村単位の遺族会が、一括して戦没者の墓碑を建立する事業を進めた中心人物は物故し、書類も処分されていて一次史料からその事業の意図などを明らかにすることはできない。しかし前後の状況から、野田村が隣村と合併して新町制が発足する前に、野田村独自の事業として墓碑建立が企画され、財団法人大阪靖国霊場維持会の成立がその受け皿となり、村を挙げての事業として推進されたものと思われる。
- (2) 旧真田山陸軍墓地の墓碑は、遺骨の収納というより記念品を納めるものとして建てられ、旧

陸軍の規格より小さなスペースに統一された。また村の戦没死者全体を対象とするということから、陸軍と海軍も同じに扱い、併せて将校も下士官も兵士も同じ戦没死者として同一の規格の墓碑で扱った。建立の場所も差別がない。

- (3) 野田村の全戦没死者を真田山に墓碑建立する対象としたことは、疎開者の墓碑が存在することからも間違いのないであろう。しかし、必ずしも全員が賛同した訳ではなく、約37%の遺族は不参加であった。反面からいえば戦後の価値観の急激な変動のなかで、よく63%もの賛同をとりつけたともいえよう。その後地元にて建てた墓碑の場合も同様である。
- (4) 1950年頃に地元でまず野田軍人墓が、そして1952年頃に登美丘軍人墓がつくられ、身近にお参りする対象が出来ると、真田山からは次第に足が遠のき、特に企画の中心になった人物が相次いで亡くなり、世代が交代されるなかで、真田山の旧野田村の軍人墓については認識が薄くなりつつある。
- (5) 世代交代による祖先に対する祭祀の継承が困難になっているのは、現在の日本の一般的状況だが、特に真田山に建立された旧野田村の169基の墓碑については、これまで見てきた状況からそれが特に著しくなっている。

以上、旧真田山陸軍墓地の全体像からみれば、この野田村遺族会建立の169基の墓碑は、旧軍の建立・管理した陸軍墓地の墓碑とは明らかに異質な存在であって、そういう意味では明確に区別して扱う必要がある。しかし同時に、この旧陸軍墓地が戦後どの様に扱われ意識されてきたかを検討する上では、その存在自体が貴重な資料としての性格をもっているとも言えるであろう。

この小稿をまとめるにあたり、旧野田村の遺族会をはじめ関係する遺族の方々と、財団法人大阪靖国霊場維持会には大変お世話になった。記して厚く感謝の意を表したい。

註

(1)——1998年1月25日、国立歴史民俗博物館の「歴史における戦争の研究」Bの臨地調査による。

(2)——国立歴史民俗博物館の基幹研究「近現代の兵士の実像」の調査対象の一つとして、旧真田山陸軍墓地が設定され、現在その全体像の解明が進められている。小稿はその作業のなかで明らかになってきた基礎的課題の一つの解明をめざしたものである。

(3)——竹内理三編『角川日本地名大辞典』27大阪府(角川書店、1983年)による。

(4)——『登美丘町史』(登美丘町役場、1954年)50頁。

(5)——この住宅街の開発に当たった関西土地会社(後の関西不動産株式会社)は、20万坪の土地を入手後、欧米の田園都市を視察した社員を中心に理想的住宅計画を樹て、それを宣伝して1931～1941年にかけて約500戸を完売した。噴水を中心に放射状に上下水道を完備した街路が走り、一戸平均320坪のゆったりした敷地に家庭菜園を備えた住宅が建ち、将来は共同運動場や劇場も計画されたが、この計画はアジア太平洋戦争の開戦で実現

しなかった(以上は前掲『登美丘町史』300～302頁による)。しかし「大美野田園都市」は、現在でも大阪府内で屈指の高級住宅地として知られる存在となっている。

(6)——堺市発行『広報さかい』1997年10月1日号による。

(7)——『登美丘町史』386～387頁。

(8)——前掲『広報さかい』1997年10月1日号。

(9)——1997年6月から1998年8月にかけて、堺市遺族会の野田分会の梅井隆男氏、西沖哲尚氏、西野分会の木村和子氏、登美丘東分会の阪口才治郎氏の御自宅に伺い、手紙や電話で補充して筆者が聞きとった。

(10)——『登美丘町史』によると、松井良一氏は1933年から1947年にかけて連続3期にわたり村会議員に選出され、1954年時には西野の民生委員で、民生委員会の常務委員に就いていた。

(11)——『登美丘町史』304～308頁。

(12)——『財団法人大阪靖国霊場維持会の沿革』(同会作成、1996年)

-
- (13)——『登美丘町史』304頁。
(14)——1997年7月18日の西野の遺族会木村和子氏からの聞きとりによる。
(15)——棚橋利光編『四天王寺年表』（清文堂出版、1989年）237～241頁。
(16)——岡本寅一著『堺市 旧野田村の歴史』（自家版、1988年）97～106頁に所収。この著書と「登美丘軍人墓地」（名簿）については、阪口才治郎氏のご好意により閲覧することができた。
(17)——梅井隆男氏のご好意で閲覧することができ、野田軍人墓地の経緯もご教示頂いた。
(18)——北崎豊二『近代大阪と部落問題』（解放出版社、1997年）352頁。
(19)——同上書341頁。
(20)——(13)に同じ。
(21)——1998年8月14日、小島崇右氏から筆者が聞きとったメモによる。

（大阪府立岸和田高等学校，国立歴史民俗博物館共同研究員）